

炉辺の枕(8)

『反戦 川柳作家 鶴彬／深井一郎』

川柳を民衆の戦う武器に

美賀多台 つだわたる

2022年5月から毎月1回の川柳教室に通っています。そして西神ニュータウン9条の会HPのジョー句のコーナーに毎月投稿しています。

若い時から川柳は好きで、江戸時代の柳多留や未摘花といった古川柳を解説した『川柳の工口ティズム／下川弘』や『江戸は川柳 京は軽口／下山山下』等を読んでいました。しかし自分で作ったことはありませんでした。『俳句と川柳／復本一郎』を読んでも、同じ五七五の定型詩である俳句との違いもよく分かっていませんでした。

ところが田辺聖子の『川柳でんでん太鼓』『田辺聖子の人生あまから川柳』を読んで、それまでと違う川柳の面白さ、魅力に気づきました。彼女は、古川柳から現代の川柳まで、巧みに解説してくれました。

私も作ってみたいと、仕事を辞めた時に教室に入りました。

そして教室に通いながら時実新子の『川柳を始める人のために 新子の川柳入門』『川柳新子座』、田辺聖子の『道頓堀の雨で別れて以来なり：川柳作家・岸本水府とその時代』を読んで、さらにその深みを知り、今や川柳の魅力に取りつかれています。

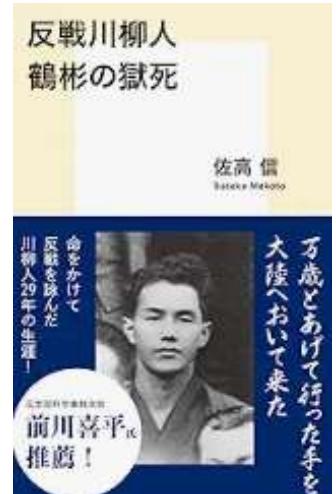
この教室では俳句を「花鳥風月を読む、季語が必要、文語体」川柳を「人間社会を読む、季語は不要、口語体」と簡明な違いを教えてくれました。人間社会全体を相手にする川柳はかなり広いテーマを持っています。

今回紹介する本は、戦前に社会の矛盾を告発し、戦争反対を貫いた川柳作家、鶴彬(つるあきら)の短い人生とその作品を紹介したものです。

手と足をもいだ丸太にしてかえし

憲法九条や平和運動に関心がある人は、おそらく小林多喜二を知らない人はいないと思いますが、同じように特高警察に捕まり酷い拷問を受けて1938年29歳で病死した鶴彬(本名:喜多一二(きたかつじ))は、川柳という小説に比べて文学性を低く見られる分野であるためか、あまり知られていないようです。

私も1998年に出されたこの本を読むまでは、よく知りませんでした。しかし彼が特高に逮捕された年に発表された句を読むだけで、すごい人だと思いました。



数句、紹介します。

- ・手と足をもいだ丸太にしてかえし
- ・屍のみないニュース映画で勇ましい
- ・胎内の動きを知るころ骨がつき

喜多一二は 1909 年に石川県の貧しい職人の家に生まれ、成績は優秀でしたが高等小学校を出て働きます。その頃から短歌や俳句を新聞投稿していました。そして誘われて川柳の道に入りました。

川柳をこれまでの「遊戯・娯楽」から「文芸」に高める川柳革新運動、新興川柳に鶴彬は近づきます。そして底辺の労働者生活、さらに4年間の兵役(そのうち半分は共産青年同盟の機関誌を軍隊内に持ち込んだ罪により監獄暮らし)をへてはっきりとプロレタリア川柳を標榜し、社会主義レアリズムを追求しました。

この頃の句は以下のようです。

- ・瓦斯タンク！不平あつめてもりあがり
- ・ベルトさえ我慢が切れた能率デー
- ・夜業の窓にしゃくな銀座の空明かり
さらに
- ・みな肺で死ぬる女工の募集札
- ・修身にない孝行で淫売婦
- ・タマ除けを産めよ増やせよ勲章をやろう
- ・稼ぎ手を殺してならぬ千人針
- ・半島の生まれでつぶし値の生き埋めとなる



川柳は詩である

今回、この本を紹介するために改めて読み返しました。彼の素晴らしさに気づいたことがあります。

鶴彬の仕事は詩作品=14 編、川柳作品=1044 句、評論作品=85 編です。29 年の人生で物心について実際に活動できたのは約 10 年ほどでした。多彩な創作活動であり、そして考え方、作品の傾向も変化しています。

多くの人と激烈な川柳論の交わしながら、貧困と官憲の弾圧という現実の厳しい中でも明るさを持っていた青年でした。そして人民戦線戦術的な発想で、幅広い川柳の流れをリアリズムの追求の方向へと示します。

この本の解説と鶴彬の生き方から、川柳は「真実を具象的にうたう」詩であると思いました。